小和田館跡

発掘調査概報

長坂町教育委員会

1985

小和田館跡

発掘調査概報

長坂町教育委員会

1985

序

長坂町では、昨年に引き続きまして、県営圃場整備事業に伴なう埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

町内に所在いたします、史跡・名勝・天然記念物などとともに、埋蔵文化財は、私たちが現在、享受しておりますもろもろの生活が、一体どのように成立してきたのか、いいかえれば、この地で、わたくしたちより先に生まれた人達が、血と汗を流して勝ち取ってきたものとは、一体なんなのかを明らかにする資料であり、これを冷静に見つめ、位置づけ、そして後世に伝えることこそ、現代に生きる人間の使命であると考えます。

そのような意味で、小和田館跡の成果は、広く世に問われるべく、詳細に検討を加え、歴史の中へ位置づけていく中で、専門的研究とともに、住民のみなさまの心の糧となりますような内容に昇華させていきたいと考えています。

最後に、調査に関しまして、多大な御援助をいただいた、県文化課・埋蔵文化財センター・関係各位、また、炎天下の中、多大な御協力をいただきました地元の皆様に対しまして、深く感謝の意を表します。

昭和60年３月

長坂町教育委員会

教　育　長　　向　井　正　汎

例　　言

1，本報告書は、長坂町大和田地区県営圃場整備事業に伴なう、小和田館跡の埋蔵文化財発掘調査概報である。

2，調査は、峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて、長坂町教育委員会が実施したものである。

3，調査は、昭和59年４月23日より、同年11月27日にかけて行なわれ、昭和59年11月28日より60年３月30日にかけて、遺物整理、概報作成作業が庁舎２階整理室において行なわれた。

4，本報告書の遺物の写真、トレース、編集は、岡本範之が行ない、執筆は、第Ⅰ章を坂本正輝が、第Ⅱ章～第Ⅴ章を岡本範之が担当した。

5，本報告書を作成するにあたり、以下の方々の御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

末木　健・八巻与志夫・古屋健一郎・田代　孝・森　和敏・新津　健・米田明訓・保坂康夫・長沢宏昌・中山誠一・日向千恵・山路恭之助・深沢裕三・佐野勝広・雨宮正樹・平野修・櫛原功一・進藤祐二・数野雅彦・寺内隆夫・塚原明夫　（順不同敬称略）

6，本調査における記録、出土品は、長坂町教育委員会が保管している。

7，発掘調査組織

調査主体　長坂町教育委員会教育長　向井　正汎

調査担当　岡本　範之　（長坂町教育委員会　文化財担当学芸員）

8，調査事務局

長坂町教育委員会	教育次長	堀内　清輝
〃	学校教育課長	内藤　紀宏
〃	社会教育主事	坂本　正輝
〃	主事	入山　忠・小林　和夫・小松　千恵子・若尾　達也

9，発掘調査参加者

山本まさみ・長島澄子・清水光子・日向一子・小沢みずえ・鈴木節子・輿石スエ・堀込明子・藤森文子・堀内よしみ・小沢杏子・小沢和彦・鳥畑敏雄・鳥畑松代・浅川美代・浅川米子・中島ねのえ・中島たね子・小池みさお・浅川英三・浅川久代・細田絹代・相吉よしえ・三井種子・河西真知子・浅川洋子・山田節子・三井圭吾・浅川日出子・中島桂・清水悟・有賀望・跡部浩史・坂本宏児・細田徳哉・小尾浩樹・内田好雄・島和彦・清水和彦・松野隆治・日向勝利・小宮山幸雄・伊藤寿一・田中哲人

目　　次

序
例　言
目　次

Ⅰ，調査に至る経緯……2
Ⅱ，調査の経過……4
Ⅲ，遺跡の地理的環境……5
Ⅳ，遺跡の概要……8
Ⅴ，まとめ……30

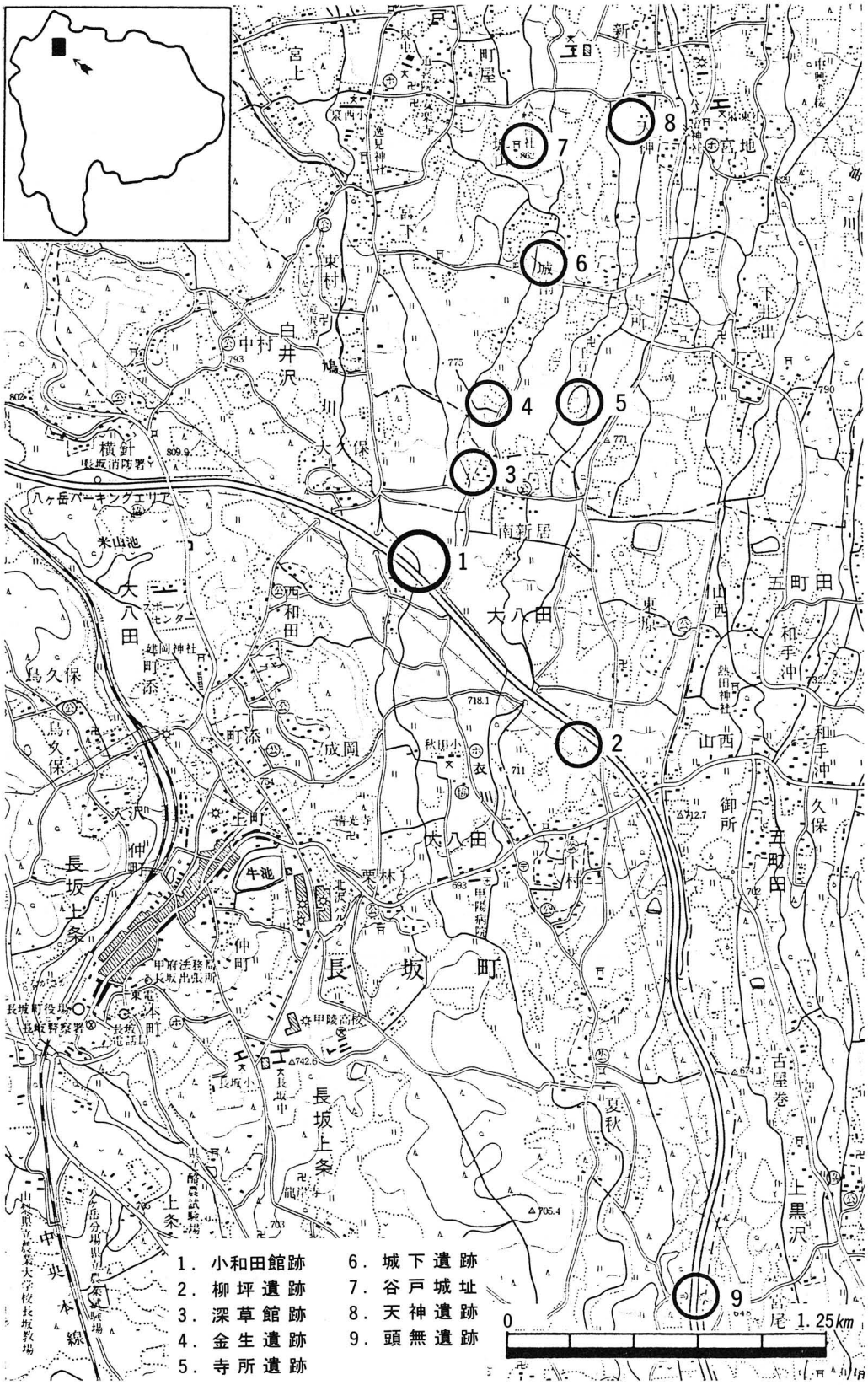
挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置（１／２万５千）……1
第２図　遺跡の立地（１／５千）……3
第３図　C地区　遺構配置図（１／480）……6・7
第４図　D地区　遺構配置図（１／480）……12・13
第５図　E地区　（本区）遺構配置図（１／480）……26・27
第６図　E地区　（西区）遺構配置図（１／480）……28

図　版　目　次

写真１　C地区　全景（１）……8
写真２　C地区　全景（２）……8
写真３　C地区　全景（３）……8
写真４　C地区　第８号住居址……9
写真５　C地区　第２号住居址遺物出土状態……9
写真６　C地区　第４号住居址カマド……9
写真７　C地区　第２号地下式壙……10
写真８　C地区　第12号地下式壙内部……10
写真９　C地区　第６号地下式壙出土遺物……10
写真10　D地区　全景（１）……14

写真11　D地区　全景（２）……14
写真12　D地区　第30号住居址……14
写真13　D地区　第44号住居址……15
写真14　D地区　第44号住居址灰釉出土状態……15
写真15　D地区　第44号住居址甕出土状態……15
写真16　D地区　第37号住居址小形長頸壷出土状態……16
写真17　D地区　第６号住居址須恵器出土状態……16
写真18　D地区　第20号竪穴……16
写真19　D地区　第21号竪穴カーボン……17
写真20　D地区　第22号竪穴……17
写真21　D地区　第39号竪穴……17
写真22　D地区　第21号竪穴……18
写真23　D地区　第18号竪穴……18
写真24　D地区　第18号竪穴カーボン……18
写真25　D地区　第１号方形石組遺構……19
写真26　D地区　第１号石組井戸……19
写真27　D地区　K－８G　掘立柱建物址……20
写真28　D地区　H－３G　土壙群……20
写真29　D地区　E－２G　土壙群……20
写真30　D地区　F－３G　土壙群……21
写真31　D地区　E－３G　石組土壙……21
写真32　D地区　E－２G　石組土壙……21
写真33　D地区　第１地点古銭一括……22
写真34　D地区　第２地点古銭一括……22
写真35　D地区　第３地点古銭一括……23
写真36　D地区　第３地点古銭（部分）……23
写真37　古銭（一貫文）……24
写真38　D地区　D－３G　水滴出土状態……24
写真39　古瀬戸鉄釉水鳥形水滴……24
写真40　和鏡（１）……25
写真41　和鏡（２）……25
写真42　E地区　全景……25
写真43　E地区　第３号住居址……29



第1図　遺跡の位置（1／25000）

Ⅰ　調査に至る経緯

長坂町では、農業生産基盤の確立を図るため、昭和54年から圃場整備事業が実施されている。「圃場整備」とは、区画整理を中心にこれに関係している「かんがい排水」「農道」あるいは「暗渠排水」等を総合的に整備することにより、水田利用再編対策の推進、作物体系の確立を図り、農地の流動化・集積化によって機械化と省力化を促進し、より大きな利益を得ることを目的とするものである。

昭和59年度は、大和田地区の71000 ㎡が県営圃場整備事業として計画され、昭和58年11月、長坂町教育委員会により現地踏査を実施し、遺跡の有無を検討した。その結果、当該計画地は昭和58年度発掘調査において明らかにされた館跡(註1)の外郭に位置すること、また、北東200 mには町指定史跡「深草城址(註2)」が、南東約300 m には「柳坪遺跡(註3)」があり歴史的に非常に重要な地区であることなどから、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、昭和58年12月、長坂町教育委員会によって実施した。2×10 mグリット方式によって計画地の全域を調査した。その結果、縄文中期から中世にかけての土器片及び、土壙、住居址等が確認された。早急に山梨県教育庁文化課、峡北土地改良事務所との3者で協議を行った結果、本調査を実施することになった。調査面積は20000 ㎡、調査主体は町教育委員会があたることとした。

昭和59年1月12日、文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、昭和59年4月17日交付の内定を受ける。同5月2日文化庁長官に昭和59年度文化財保存事業費補助金交付申請書を提出する。また、昭和59年4月16日峡北土地改良事務所と長坂町との間で、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定書を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、昭和59年4月23日から着手したが、調査の進捗にしたがって当初計画で予想された遺跡の範囲が広がるとともに、遺構のあり方も中世墓壙群を中心におびただしく検出され、遺構の重復も著しく、また、表土中及び確認面上の巨石群、地下水位に近いための湧水等により調査が難行し、計画変更を余儀なくされた。

昭和59年10月26日、文化庁長官宛に計画変更承認申請書を、また、峡北土地改良事務所長に埋蔵文化財発掘調査協定額変更申請書をそれぞれ提出した。

調査は、昭和59年11月27日発掘作業が終了し、昭和60年3月30日全ての調査を終了した。

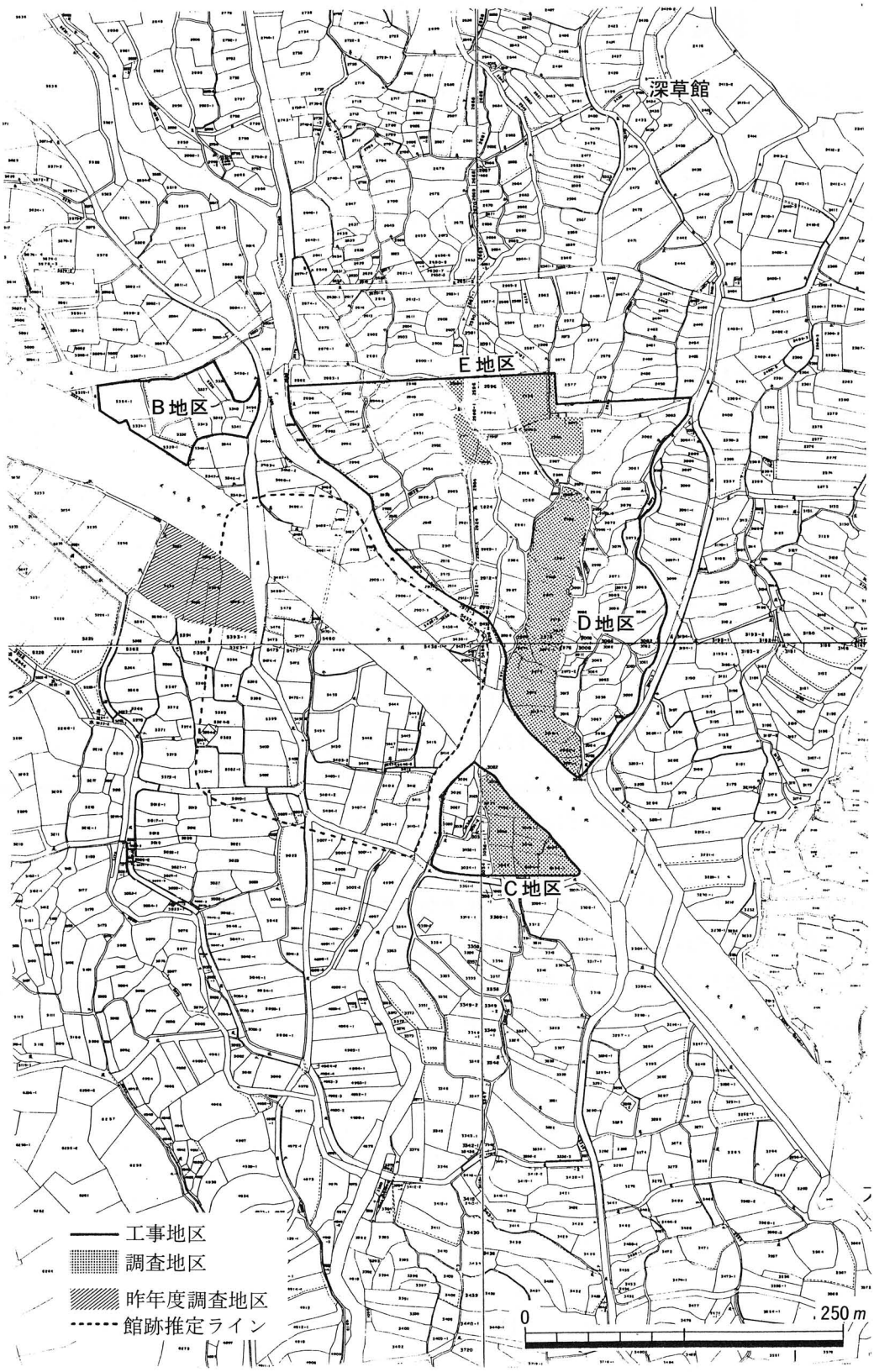
註1　『小和田遺跡発掘調査概報』　長坂町教育委員会　1984

註2　『日本城郭大系　8　長野・山梨編』　日本往来社　1980

「長坂町の文化財」　長坂町教育委員会　1976

註3　『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内』

山梨県教育委員会　1975



第２図　遺跡の立地（1／5000）

Ⅱ　調査の経過

昭和58年４月23日より調査を開始する。本年度の調査の予定地区をB地区・C地区・D地区と命名し、試掘を開始した。既に上記３地区には、昨年暮に試堀を行なっているが、さらに念入りに行ない、遺構のあり方を確認した。その結果、B地区は、遺構・遺物ともに検出されず、本調査の必要がないと判断された。C地区は、北西側½を、D地区は、衣川の氾濫原と埋没谷との間に挾まれた南北に長狭な尾根上部分について調査を実施することにした。

５月19日、D地区より本調査を開始する。まず、衣川の氾濫原に沿って堆積している巨石密集部分を人力で表土の除去作業を行なう。この表土中よりは、中世常滑・古瀬戸・美濃の陶器類や土師質土器、また縄文中期土器片等が多量に出土した。併行して、石のないところには、５月21日より重機を投入して表土のはぎとりを行なう。

表土のはぎとり作業中、古銭が大量に発見され論議を呼んだ。（６月２日）

５月29日より、重機のあとを追って確認面の精査を行ない、グリッドを設定する。中央道の側道と併行するように基準線を決め、東からA～P、南より１～16とし、グリッドナンバーを命名した。１グリッドは、10メートルメッシュを基本とする。

６月12日より遺構の掘り下げを開始する。その間、古瀬戸鉄釉水鳥形水滴（７月６日）や和鏡２枚（７月12日）等の遺物が発見されている。

９月18日、D地区の調査を終了し、引き続きC地区を開始する。重機による表土はぎとり作業は、既に５月の段階で終了しているので、順次東側、すなわち鳩川寄りから遺構確認・掘り下げ作業を開始した。

10月19日に調査の終了をみたが、圃場整備の工事計画に若干の変更があり、急遽D地区の北側が追加工事されることとなったため、この追加分を検討したところ、D地区の遺構群と同尾根上に位置しており、遺跡の存在が濃厚と判断された。そこで、この地区をE地区として設定し、10月16日より重機を投入して表土の除去を行ない、22日より作業員を投入、調査を開始した。

E地区よりは、中世の土壙墓５基に、人骨として認定できるほどの遺存状態を示すものが５基発見されたため、長坂警察署に届出を行なう。

11月27日、E地区の調査を終了、今年度の小和田館跡にかかる調査をすべて完了した。

Ⅲ　遺跡の地理的環境

長坂町の位置する八ケ岳南麓は、八ケ岳山体の雄大かつなだらかなスロープラインが広がり上流より湧出した小泉が、裾に向って流合・分枝をくりかえしながら、山麓を潤し、ついには須玉川や釜無川に注ぎ込む。

やや微視的に見るならば、上流より南下した小河川は、下流に行くに従って統合され、侵蝕力を増し、標高780メートルライン付近（村山北割・大八田・白井沢を結ぶライン）より比較的深い谷を形成しつつ流下する。

東から、西川・甲川・鳩川・大深沢川・小深沢川などの中河川は、南へ向ってほぼ併行して流下する結果として、各河川の間は、頂部を比較的フラットとする南北に長狭な尾根を形成することとなる。

南麓にみられる遺跡群は、こうした尾根上に立地することが多く、小和田館跡もその一つである。

近年、北巨摩郡地方において、圃場整備等の大規模開発が進展し、漸次、南麓の様相が明らかにされつつあるが、本遺跡を中心としていくつかの遺跡を紹介してみたい。（第１図参照）

１．小和田館跡　中世館跡

２．柳坪遺跡　昭和48年・59年調査。縄文中期・弥生中後期・古墳前後期・平安・中世の遺物が出土している。住居址数88。

３．深草館　中世館跡

４．金生遺跡　昭和55年調査。縄文前期初頭～晩期終末・平安・中世・近世。

５．寺所遺跡　昭和54年調査。縄文前期諸磯期の住居址３軒・中期１軒。

６．城下遺跡　昭和56年調査。縄文、平安時代の住居址。掘立柱建物址が多い。

７．城下（谷戸城）　中世城址

８．天神遺跡　昭和57年調査。縄文時代前期諸磯期の住居址49軒・中期五領ケ台期８軒・平安期３軒土壙480 基。

９．頭無遺跡　昭和48年調査。縄文中期後半、古墳前期。住居址数18軒。

これらは、すべて長坂町から大泉村にかけての遺跡であるが、小淵沢町、高根町、須玉町、白州町等の近隣町村にも注目すべき資料が増加している。

特にこれらの中で、須玉町中尾城址、小淵沢町笹尾墓址などに引き続いて、今回の小和田館跡の調査は、中世城館跡の貴重な資料であり、武田氏に継続する甲斐武士団の動向を明確にしえるものとして、今後の城館址研究に与える影響は大きい。

第３図　Ｃ地区　遺構配置図（1／480）

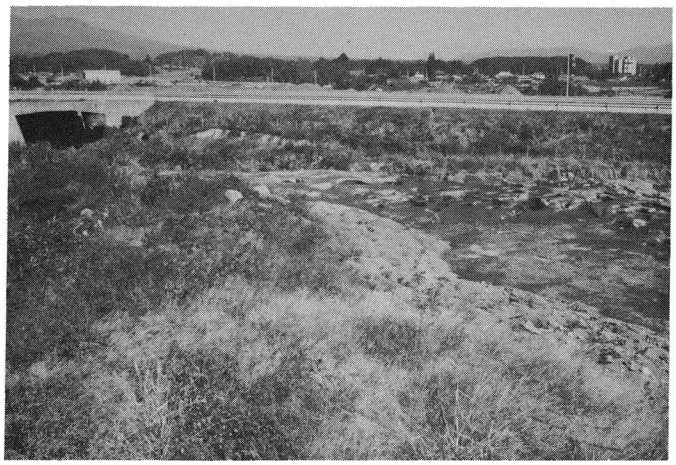


写真 1　　C地区　全景（1）

写真 2　　C地区　全景（2）

写真 3　　C地区　全景（3）

Ⅳ　遺跡の概要

小和田館跡は、長坂町のほぼ中央部、中央道と鳩川が交差する地点にあたり、鳩川と衣川に挟まれた南北に長い小尾根上に営なまれている。

今回調査対象となった地点はこの台地のほぼ全面であり、小和田館跡全体の縄張よりみると鳩川をこえた東隣ということになる。

以下、各地区毎に、遺構の概要を説明していきたい。

1、C地区

今回の調査対象地は、現地形及び調査経緯の事情により、C・D・Eの3地区に分けて調査を実施したが、その中のC地区は、最も南に位置し、かつ館跡の主要部に接している。

写真1・写真2・写真3は、C地区の全景である。

中央道に沿って遺構が集中して検出されている。東西にA～I、南北に1～5としてグリッドを設定し調査を行なった。調査区の南半は、田の造成の際のカットによって、大半が破壊されていた。

C地区より検出された遺構は平安時代住居址7軒、時期不明住居址1軒、地下式壙12基、棚

写真 4　　C地区　第8号住居址

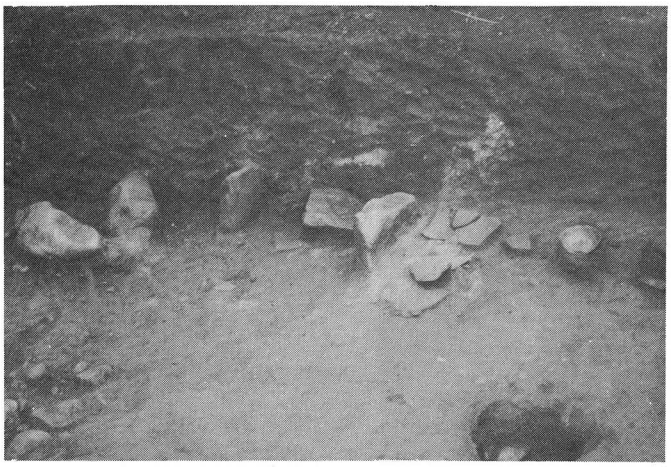


写真 5　　C地区　第2号住居址遺物出土状態

写真 6　　C地区　第4号住居址カマド

列、土壙群、ピット群となっている。遺物からは、中世の土師質土器の皿・内耳土器及び陶器の出土をみており、館跡に伴うものと判断される。

各遺構の代表的なものの写真を掲げながら、以下説明していこう。

平安時代住居址

1号住を除く残り7軒が該当する。住居址のあり方は散在的であり、D地区の4号住・5号住・6号住等と同様なあり方を呈している。

写真4は、C地区東南端に位置する8号住である。壁溝・床面ともに良好な遺存状態を呈している。他の住居もそうであるが、柱穴・ピットは規則的なものは存在していない。

写真5は、2号住の遺物出土状態である。写真右の甲斐型坏は、10世紀第1四半期とされるものである。他の住居も概ね同様な時期である。

写真6は、4号住のカマドである。4号住は、5号住と重複関係にあり、前者の方が新しい。4号住のカマドは、東壁南側に構築された石組のものである。石組カマドは、北巨摩郡地方に普遍的にみられる形態である。また、カマドと住居コーナーとの間を、3つの平石を立てて区

写真 7　　C地区　第２号地下式壙

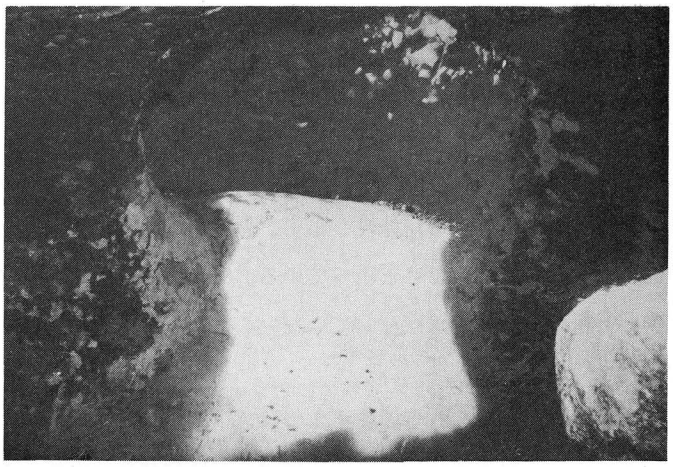


写真 8　　C地区　第12号地下式壙内部

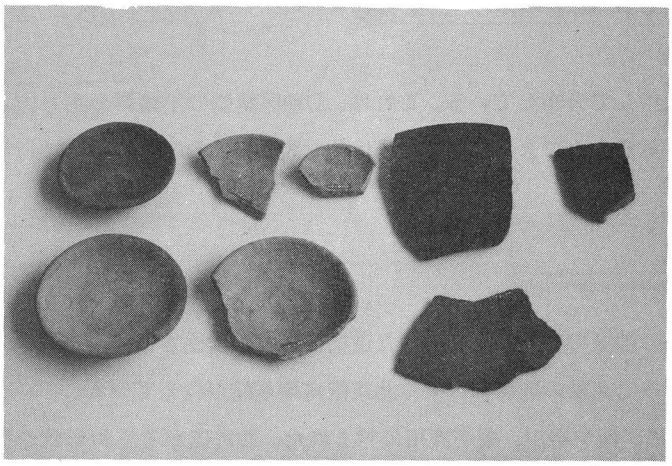


写真 9　　C地区　第６号地下式壙出土遺物

画し、意識的に空間をつくり出している。鬼高式の住居によく伴なうような貯蔵穴を思わせ、興味深い。

地下式壙

写真７は、第２号地下式壙である。地下式壙は、12基ほど検出されているが、中央道をはさんで北側のD地区からは一基も検出されていない。従ってこの付近に集中的に分布しているものと思われる。この状況は、昨年度調査の内容と共通するところが多く、館跡の主郭部をはさんで両側に地下式壙が集中する地区が存在している事実は、館跡の一つの在り方として興味深いものがある。写真の地下式壙であるが、長軸長2.54ｍとやや小型のもので、玄室床面は円形のプランを呈し、すぐ接続して入口部がある。入口部は地上よりほぼ垂直に切込まれ、下部に半月のテラスを有している。

12基の地下式壙は、玄室のプランや入口部の位置などから、いくつかのタイプに分けられる。まず、玄室の形態として、円形、胴張方形、長方形などがあり、入口部は、ほぼ垂直に切りこまれることは共通しているが、ステップをもつもの、無いもの、玄室の長辺中央に位置するもの短辺中央に位置するもの、コー

ナーに位置するものなどがある。また、C地区に存在する地下式壙に極めて特徴的なものとして、玄室の四壁及び天井部に意図的に炭を塗付するか、いぶしたような真黒のすす状のものが一面に付着している事実がある。この特徴がみられないものは、２基のみで、他のものはすべてこの特徴を備えている。

写真８は、第12号地下式壙の内部から入口部にかけてのものであるが、べったりと炭が付着している。さらに、いずれの地下式壙においても、玄室床面上には焼成痕が全く認められていない。こうした特徴は、昨年度調査のものにも、近隣の資料の中にも類例をみないものである。今後、地下式壙の機能を考えていく上での一つの資料となろう。

また、C地区の地下式壙群からは、少量ずつではあるが、土師質土器や古瀬戸の灰釉などが出土しており、時期決定とともに、土師質土器の一括資料として注目される。

写真９は、第６号地下式壙の一括資料である。左の５個の土師質皿は、重なった状態で出土したもので、また、内耳土器も含んでいる。タイプから、およそ15世紀の年代が与えられるものと思われる。

尚、12号地下式壙からは、２体分と思われる人骨の骨片が検出されている。

柵列

写真は掲示しなかったが、D－１GからB－４Gにかけて、南北方向に26個のピットより成る柵列が検出された。これは、さらに両方向へ延びる可能性がある。柵列を境として、東側は衣川の旧氾濫原となり、ローム面が東へ向ってだらだらと下っている。柵列東側に設定した４本のトレンチからは、遺構・遺物とも目だったものは存在していないことから、何らかの目的で、衣川沿いに構築された柵列と考えてよかろう。

この目的とは、現時点では２つの可能性が考えられる。まず１つは、小和田館跡の外郭を区画するものであり、衣川を天然の堀とし、これと組合せて防禦的機能をも持たせた、とするもので、今１つは、衣川の氾濫の防止のための堰堤としての機能である。柵列自体の時期が決定できないため、いずれとも判断しかねる。

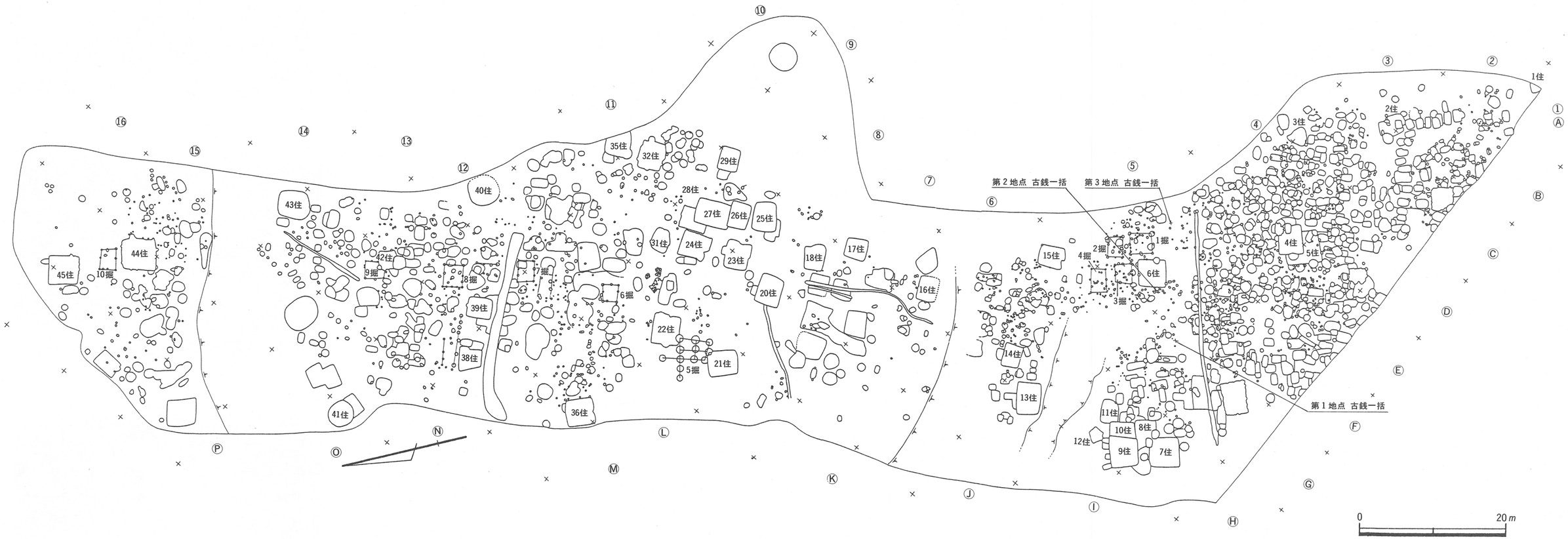
土　・ピット

１及び２グリッドラインに集中して分布している。これは、D地区南側の土壙群のあり方と共通し、続きのものとして把えることができる。個々の具体的な説明は、D地区において行ないたい。

2　D地区

中央道の北側に位置し、３つの地区の中で最も充実した遺構・遺物が検出されている地区である。小和田館跡の主郭部よりみて北東の地点で、すぐ北東側に深草館が控えている。

D地区は、第２図に見るように、西を鳩川、東を衣川に挾まれた、北に広がる三角形状を呈している。この三角形の地区には、スクリーントーン部の調査区の尾根部と、西側に谷を隔て



第4図　D地区　遺構配置図（1／480）

写真10　　D地区　全景（1）

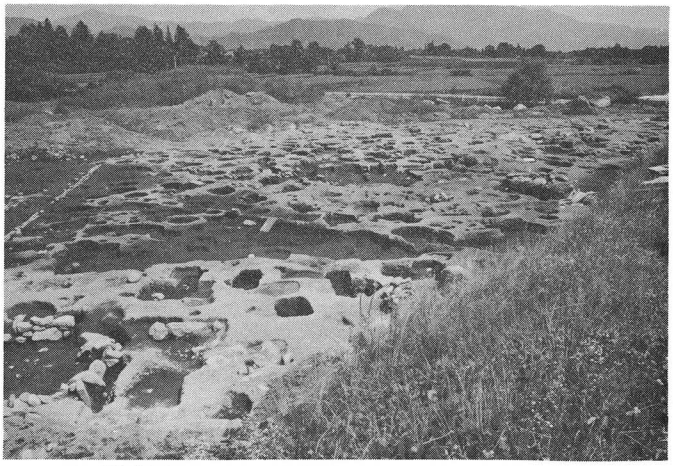


写真11　　D地区　全景（2）

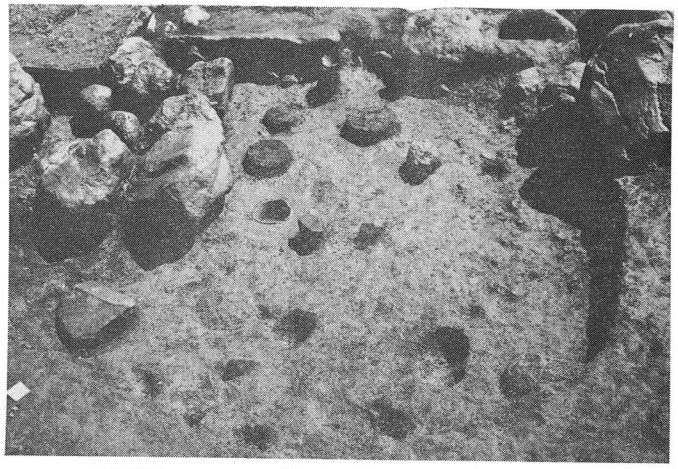


写真12　　D地区　第30号住居址

て、もう一本の尾根が存在している。試掘調査を行った時点では、西側の尾根部よりは、遺構・遺物とも検出されなかったため、東側の尾根部に調査をしぼることとなった。（写真10・11）

D地区よりは、縄文時代中期狢沢期～新道期の住居址2軒、平安時代住居址6軒、中世に属する竪穴29基、掘立柱建物址10軒、方形石組2基、石組井戸1、土壙・ピット多数となっている。また、遺物面では、3つの地点の古銭一括、合計約6千枚、古瀬戸灰釉四耳壷、古瀬戸鉄釉水鳥形水滴、和鏡2面など中世の逸品資料が出土している。

縄文時代住居址

写真12は、30号住居址である。G－10Gに位置、衣川の氾濫原のため人頭大から巨石に至る河原石の間の僅かな空間を利用して構築されたものと思われる。プランは不正円形を呈し、柱穴は、はっきりしない。中央やや東寄りに埋甕炉がある。遺物は狢沢期新段階から新道期にかけてのものである。

平安時代住居址

平安期の住居址は、D地区において散在的に存在している。さらに、北側と南側に分布が分かれ、中央部には見あたらない。これは、C地区に連なる南の住

写真13　　D地区　第44号住居址

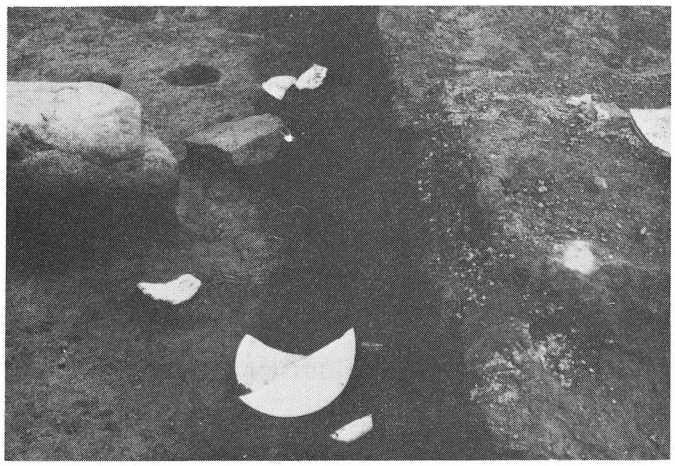


写真14　　D地区　第44号住居址　灰釉出土状態

写真15　　D地区　第44号住居址　甕出土状態

居址群と、E地区に連なる北の住居址群に分かれる可能性がある。

写真13は、第44号住居址である。この期の住居址の典型例といえる。南北4.65 m、東西4.26 m で、方形に近い長方形を呈する。東壁南寄りにカマドを有し、遺物は、全体的に東南コーナー側に集中して検出されている。壁溝は、しっかりした深いものが完周し、床面も堅緻である。カマドは、例によって石組カマドであり、良好な焼成面が検出されている。柱穴は、この期によくあるように、規則的なものは見あたらない。

遺物は、写真14の灰釉椀、写真15の甕などの出土をみている。前者の灰釉椀は、東濃製のもので、大原２号窯期併行であり、10世紀第１四半期前後に位置づけられる。

写真16は、第37号住居址より出土の小型長頸壷である。東濃製のもので、頸部から胴部にかけて、一はけぬりに灰釉が施されている。光ケ岳１号窯期～大原２号窯期にかけてのものと思われる。完形である。

写真17は、第６号住居址より出土の須恵器である。　火だすき痕が内外に明瞭に残されており、胎土は砂粒を多く含み、焼

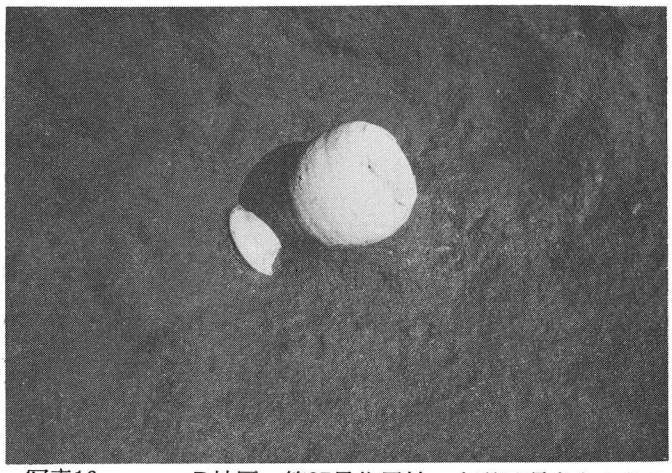


写真16　　D地区　第37号住居址　小形長頸壷出土状態

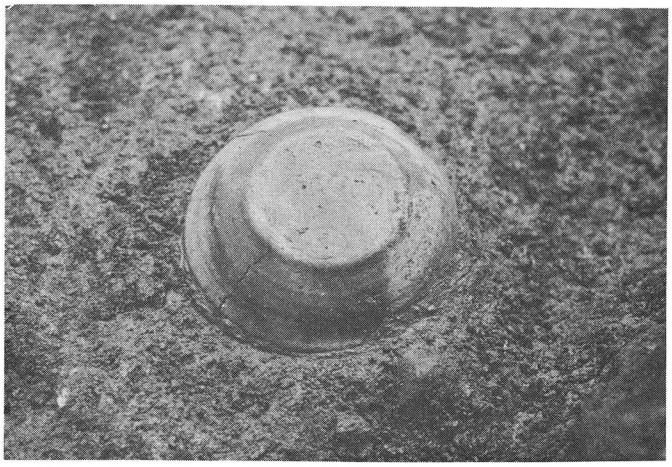


写真17　　D地区　第６号住居址　須恵器出土状態

写真18　　D地区　第20号竪穴

成は極めて不良である。この様な須恵器は、北巨摩郡地方や長野県富士見町や茅野市にもみられる。その生産地や流通などの問題は、全くわかっていない。

D地区の平安時代住居址は、概ね、９世紀第４四半期より10世紀第２四半期にかけての時期に属するものと思われる。

また、６・44・45の各住居址には、掘立柱建物址を伴なっている。北巨摩郡地方の平安時代集落址には、掘立柱を伴なうことが多い事は、すでに周知されているところで、本遺跡においても例外ではない。ただ、掘立柱自体の時期が明確にしえないため、住居址と掘立柱が対となるとは断定できない。

中世の竪穴

D地区に最も特徴的な遺構として、29軒に及ぶ中世の竪穴を上げることができる。

この中世の竪穴とは、方形ないしは長方形のプランを呈し、９本柱を持ち、覆土中より中世常滑の破片や土師質土器を極く少量出土する、というもので、近隣近県にも類例を見出せないものである。

写真18は、第20号竪穴である（必ずしも住居址として認識できるものではないため、単に竪穴と呼称することにする）。この

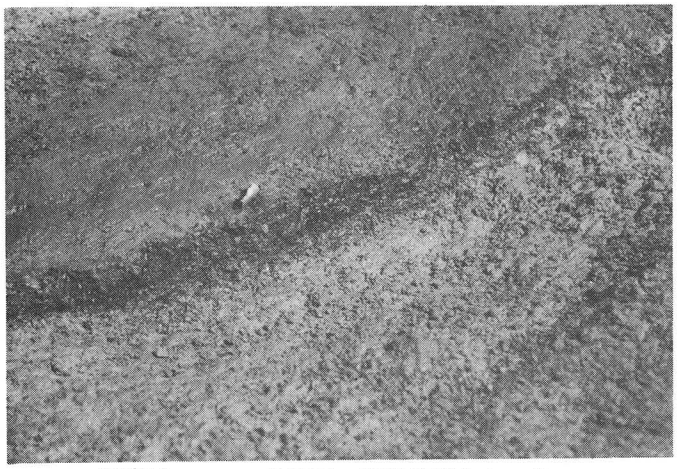


写真19　　D地区　第21号竪穴カーボン

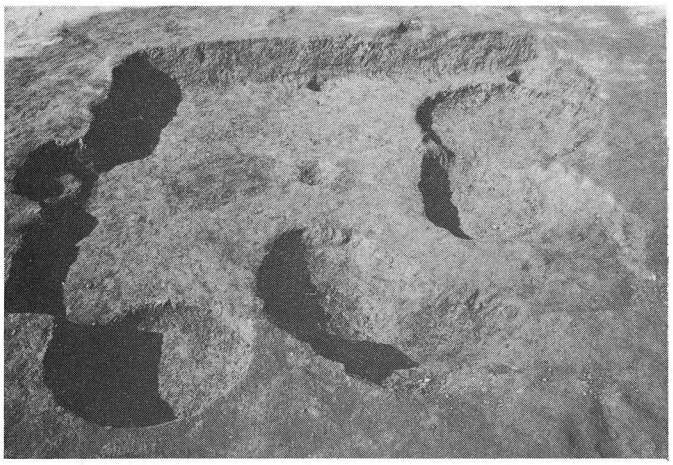


写真20　　D地区　第22号竪穴

写真21　　D地区　第39号竪穴

竪穴には、いくつかのパターンが見られるようであり、第20号竪穴はその一つといえる。プランは、やや東西に長い（写真横方向）長方形を呈し、コーナーは、やや丸みを帯びる。掘り込みは、第20号の場合、40〜50 cmで、最も深いものは、第35号竪穴の100 cm を超えるものもあり、概して深い。そして辺の一部には、（第20号は、右手の中央）内側に掘り残し部分をつくり、その右側のコーナーには、床面上にカーボンが堆積するエリアを必ず持つ。柱穴は、コーナーと辺の中央及び柱居の中央に合計９本が、規則正しく整然と並んでいる。柱穴は比較的浅く、床面より20 cm前後である。また壁溝や間仕切はなく、床面は軟弱で、ふみかためられたような痕跡は皆無である。コーナーに存在するカーボンは、掘り込みを全く伴なわず、床面の上にうっすらと堆積するものがほとんどで、他にも竪穴内の任意な地点にカーボンを伴なうものも多い。（写真19）

写真20は、第22号竪穴である。４つの土壙によって大きく切られているため、わかりにくいが東南コーナー（右下）には、カーボンの堆積が認められ、床面中央西よりにも円形の堆積が確

写真22　　D地区　第21号竪穴

写真23　　D地区　第18号竪穴

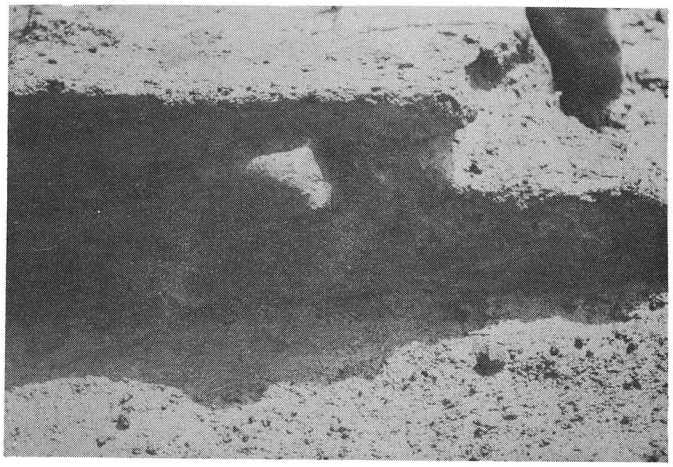


写真24　　D地区　第18号竪穴カーボン

認された。柱穴は9本柱で、中央のピットは、柱穴の形をなしていない。

写真21は、第39号竪穴である。これは、南北に長い長方形を呈し、内側への張り出しは有していない。柱穴は、北側の2つのコーナーを除き、他は全部そろっている。コーナーには自然石があり、ピットをつくれなかったためであろう。

写真22は、第21号竪穴である。この竪穴には、床面中央の柱穴がない。これ以外の主柱の他に壁に沿って副柱が存在している。内側に張り出しを持たず、床面中央北側にカーボンが堆積する。

写真23は、第18号竪穴である。プランは不正長方形で、柱穴も見あたらない。しかしながら、北西コーナー近くに堆積したカーボンは、極めて多量で、サンドイッチ状に堆積していた。（写真24）

以上、数例の竪穴のあり方をみてきたが、個々の細部においては異なるところが多いけれども、全体としては、共通点がみとめられ、むしろ一貫した強い規範が感じられるのである。

次に、これら竪穴の年代であるが、29軒のうち半数以上に出土遺物がなく、あっても復元に堪えない破片で、年代決定の決

め手となるような資料はない。ただ、強いて判断するなら、14号竪穴よりの常滑の胴部一括、7号竪穴の内耳土器などから、概ね15世紀前後と考えて良いのではないかと思われる。

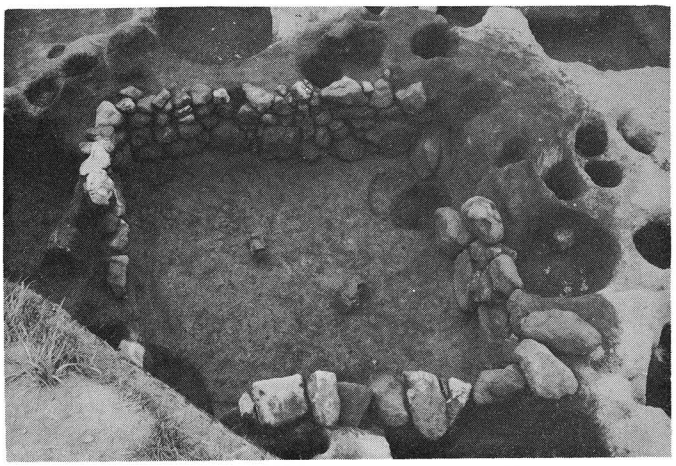


写真25　　D地区　第1号石組遺構

方形石組遺構

第1号、第2号の2基が検出されている。前者は、C—1G後者は、G—2Gに位置し、両者ともにD地区の南端に存在している。

写真25は、第1号方形石組遺構である。一辺が約3．2m の方形のプランを呈し、現況で3～5段の丸石・平石が整然と積まれている。確認面から掘り始める時点では、石組内に崩落した石で充塡され、それを除いてゆくと、写真の石組が現われ始めた。この崩落した石に混じって石臼や浅鉢型の石皿、内耳土器などが検出された。さらに下底面には、白色粘土がみられたことも注意される。

方形石組遺構は、近隣では、大泉村金生遺跡(註1)や一宮町豆塚遺跡(註2)、勝沼町勝沼氏館跡(註3)などに類例があり、概ね、水溜機能とされているものである。これらは、いずれも水路となる溝の途中もしくは末端に構築されたもので、特に館跡に付随する例が多いことは注目される。本遺跡D地区の2基の方形石組遺構には、水路を伴なっておらず、そのため水溜と断定できないが、床面に粘土状のシルトもみられることから、水溜とされる可能性もある。

写真26は、第1号石組井戸である。D—2Gに位置し、D地区の南端、1号方形石組の近くに存在している。確認面より底まで2.03 m、上端口径1.63 mで上から下に向ってすぼまる形を有する。昨年度調査でも同様な井戸が検出されており類似性が指摘される。

構造は、石組より大きめな円筒の穴を掘り、平たい横長の石

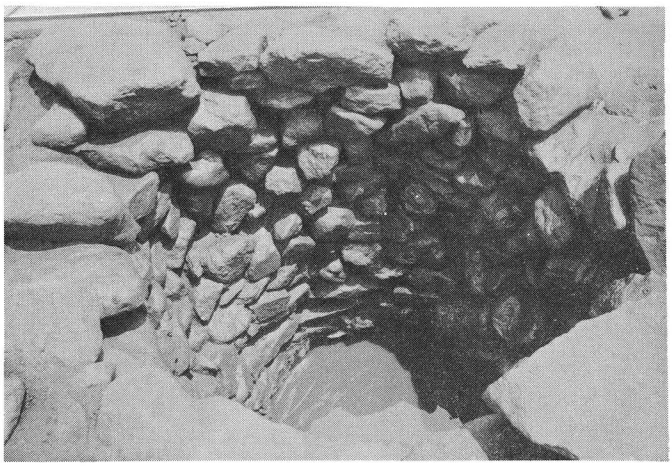


写真26　　D地区　第1号石組井戸

写真27　　D地区　K—8G　掘立柱建物址

写真28　　D地区　H—3G　土壙群

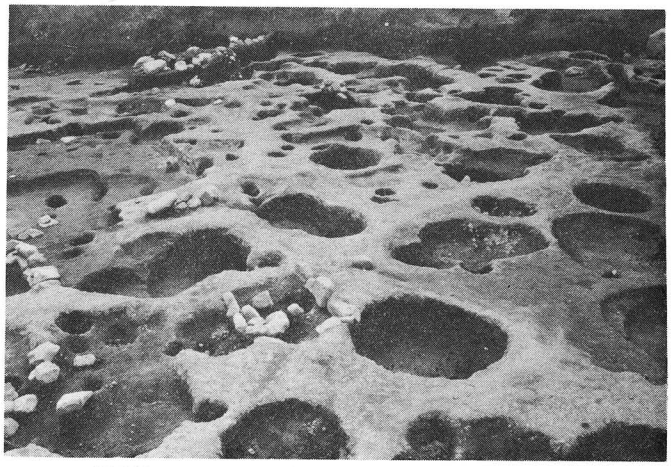


写真29　　D地区　E—2G　土壙群

を使って下端から70～80 cm積み、その上に小頭大の丸石を、ときには小石を間に充塡させて安定させ、上部に至ってやや横長の巨石で囲う、というもので、計画的な築造工程が認識される。

覆土中から、内耳土器の胴部破片が検出されており、中世館跡に伴なうものと考えられる。

掘立柱建物址

写真27は、K－8Gの掘立柱建物址である。D地区よりは、10軒の掘立柱建物址が確認されているが、例えばD地区南側にあるピット群などの中には、当然掘立柱となるものがあると思えるが、現状では確認不可能である。写真27は、特異な総柱式プランを呈し、個々のピットも大きいが、柱根は検出されなかった。本例を除く他9軒は、すべて小規模な側柱式である。時期が明確にし得ないため断定は避けるが、平安時代住居址に伴なう例が多いようである。

土壙

D地区において中世の竪穴とともに特徴的なものに、土壙がある。土壙の個々のものは、どこの遺跡にもみられるような普遍的なものであるが、本遺跡の場合、2・3グリッドラインの土壙群の数と密度は、おどろくほど多く濃い。

写真30　　D地区　F—3G　土壙群

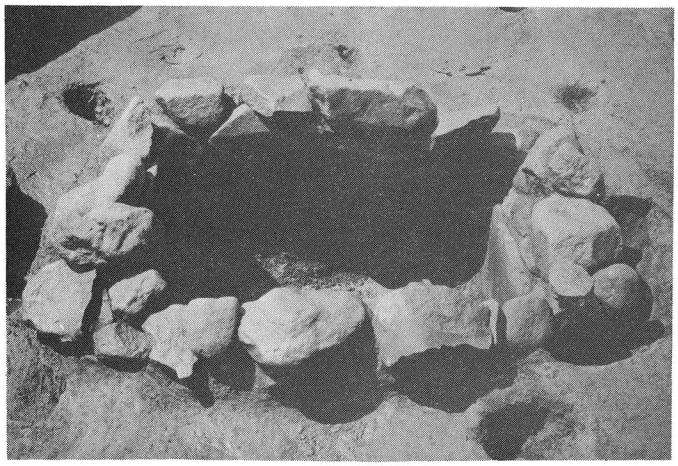


写真31　　D地区　E—3G　石組土壙群

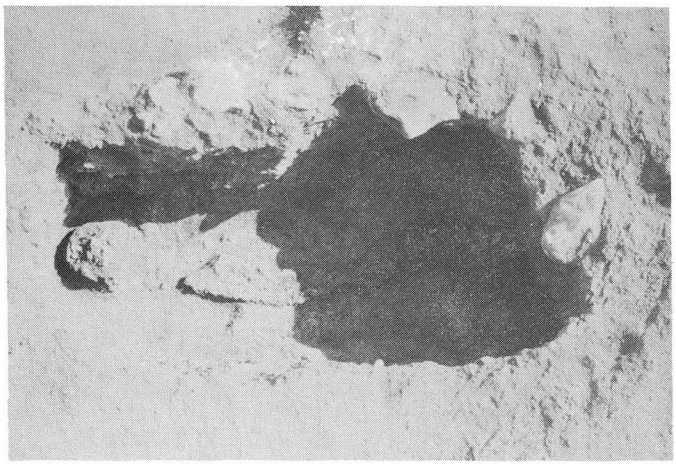


写真32　　D地区　E—2G　石組土壙群

個々の土壙をみると、大きく3つのタイプに分類されると思われる。1つは、長辺1.6 ～1.7m前後、短辺0.5 ～0.7m前後の長方形をなすもので、長軸方向が南北を向くものが多く、あるいは東西を向き、規則性が認識されるものである。また1つは径0.8 ～1m前後の円形をなすものである。また今1つは、前者の長方形をなす土壙に石組を用いたもので、規模は前者に準ずる。この石組土壙にも、南北あるいは東西の規則性が感じられる。写真28は、H－3Gの土壙群で、長方形土壙群の典型である。深さは、20～40cmくらいでどれも深くはないが、四周の壁はほぼ垂直に立ち上がり、また底面もフラットをなすものが多い。古銭が単独または数枚検出されるものが多いようである。D－3GのSK9・10の覆土最上層より出土した古瀬戸鉄釉水鳥形水滴は、この長方形土壙の時代判定の一つの目安となる。同水滴は14世紀代の瀬戸製品でありSK9・10は、それ以前に構築されていたと考えられる。

写真29は、E－2Gの土壙群で、円形土壙群の代表といえる円形土壙については、大きさもまちまちで、壁の立ち上がりや深さも一定していない。先述の

径80〜100 cm で、プランが真円をなすものは、壁が垂直で床面がフラットなものが多い。円形土壙からは、遺物が全く検出されていない。

写真30は、F－３Gの土壙群で、中央には３基の石組土壙が存在している。石組は、壁を支えるように下から積まれるものと、上端だけを囲うようにして組まれるものとが存在しているが、後者の方が多い。

写真31は、E－３Gの石組土壙である。これは、前者のタイプで、壁を平たい自然石でおさえつけるように、しっかりと積まれている。

写真32は、地区が異なるが、E地区のE－２Gの石組土壙である。後者のタイプのもので、この土壙の場合、人骨が残存していた。頭部を北に向け、左を下にねかせるようにして、強く足を折り曲げた屈葬形態のものである。このことから、石組土壙は、墓地的機能を有していたと考えることができよう。

写真33　　D地区　第１地点古銭一括

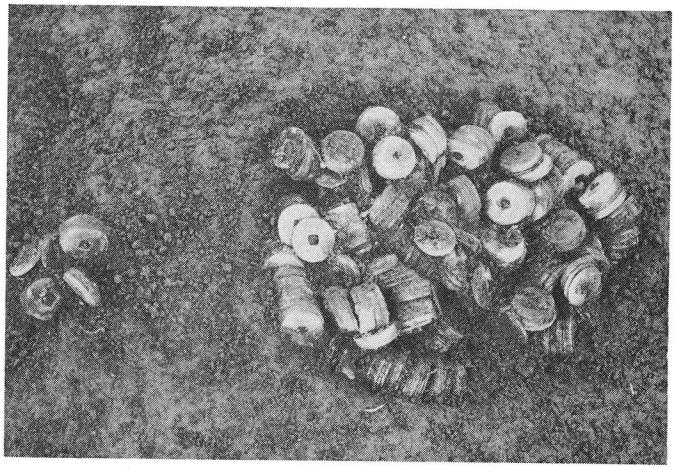


写真34　　D地区　第２地点古銭一括

ピット

掘立柱建物址や柵列などの規則的な配列をもたない任意なピット群を一括する。このピット群も、土壙の場合と同じように数は著しく多く、また、ある程度のまとまりも認識されるようである。例えば、E－２G、F－３G、F－４G、H－５G等にみられるように、やはり何らかの建物址の存在を考えるべきであろう。

古銭

次に、D地区より出土した重要な遺物についてみていこう。古銭の一括は、３つの地点より出土している。それぞれ第１地点、第２地点、第３地点と呼称している。

写真33は、第１地点の古銭一括で、F－３Gに位置している。銭は、一定の単位で束ねられ、それを併行におくようにして検

写真35　　D地区　第３地点古銭一括

出された。銭束の中を通っている紐は、遺存状態が悪く、ほとんど原形をとどめていないが、確認はできた。この確認面より下には、掘り込みらしいものはなく、単に確認面よりやや下の面にのっていたもののようである。銭が取り上げられたあとには、もみがらが下に敷かれてあった。この地点よりのものは、合計約1000枚ほどである。

写真34は、第２地点の古銭一括である。F－４Gに位置し、第１地点から北東へ約５ｍ 離れている。銭のたばね方は、第１地点と共通しているが、やや乱れた形で重ねられており、またどのようなわけか、飛び地状の一群が存在していた。本体の方には、方形をした一辺20数cmのピットがあり、深さは10 cm余りで、その中に銭が充塡されていた。この地点よりは、合計２千枚の銭が検出されている。

写真35は、第３地点の古銭一括である。これは、第１地点や第２地点のものとは異なり、古瀬戸灰釉四耳壷の中に、約３千枚の古銭がぎっしり詰まった状態で出土した。中の銭は、すべて、わらの紐によってたばねられ、このわら紐の依存状態は、きわめて良好であり、原形は全く損なわれていない。銭は、100枚弱を単位として結び目をつくり整理されてあった。(写真36)四耳壷の中で最も特徴的だったものは、一貫文の銭である。２本のわら紐が環状に結ばれそこに、100枚単位の銭が10単位、束ねられていた。(写真37）第３地点のものの中から、選んで100数十枚ほどばらして銭の内容をみてみたところ、開元通宝などの唐銭、元祐通宝などの北宋銭、洪武通宝、永楽通宝などの明銭など十数種類が含まれていた。特に、永楽通宝以後の銭がみとめられないため、15世紀初頭の時期をあまり隔たらない時期に埋納されたものと考えてよかろう。また、四耳壷の年代も、15世紀の前半のものとして把えられるものである。

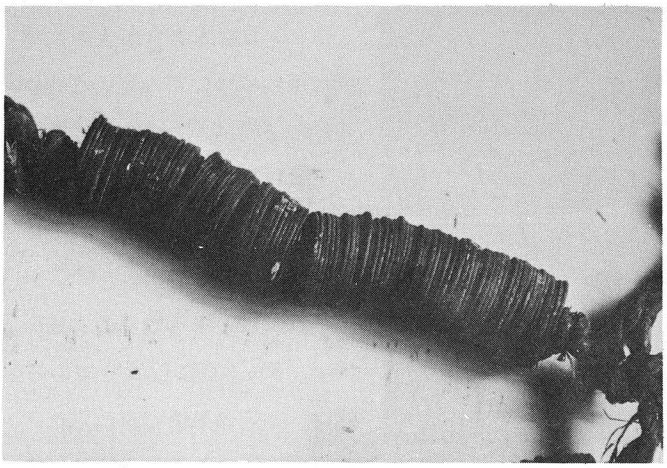


写真36　　D地区　第３地点古銭（部分）

次に、D－３Gより、古瀬戸鉄釉水鳥形水滴が出土している（写真38)。これは、先述したように、長方形土壙の時期決定の

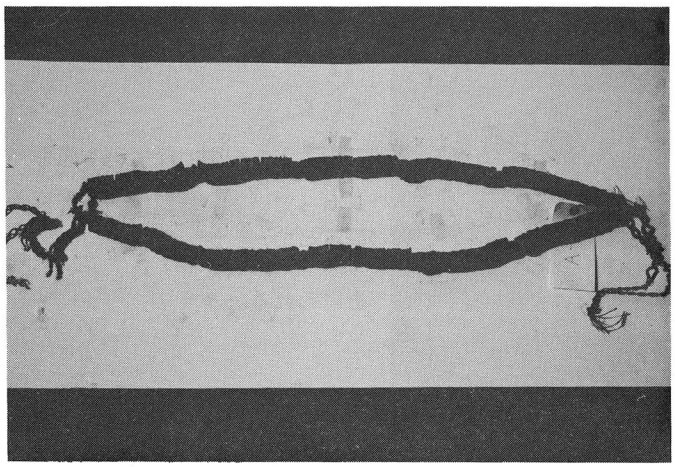


写真37　　古銭（一貫文）

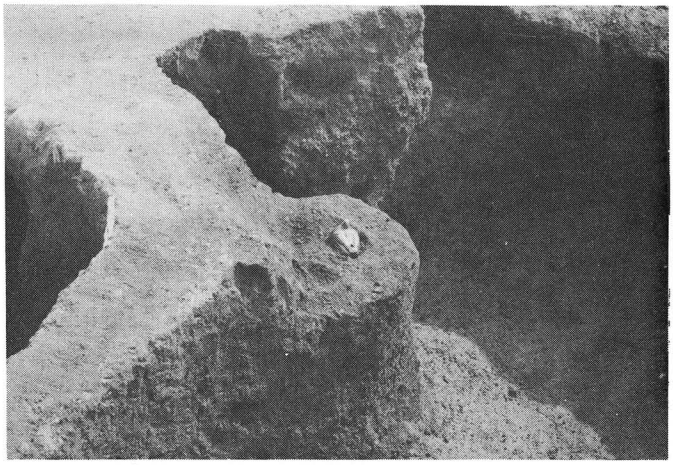


写真38　　D地区　D—3G　水滴出土状態

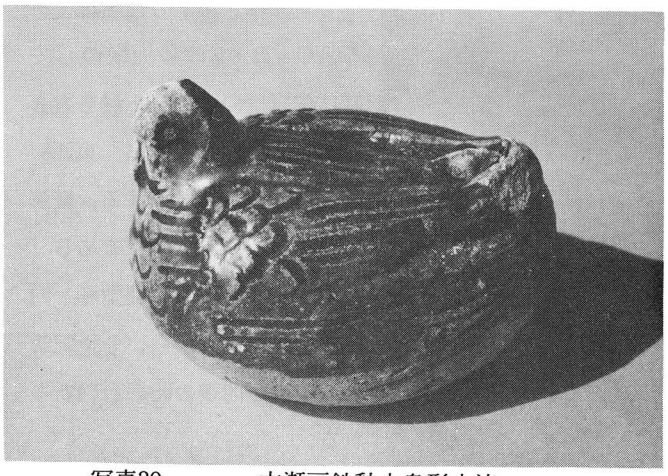


写真39　　古瀬戸鉄釉水鳥形水滴

一つの目安になるとともに、館跡それ自体に伴う資料の中で、もっとも遡るものである。長さ5.8cm、巾4.5cm、高さ4.3cmで、頭半分とくちばし、及び尾部を欠損している。全体的に卵形を呈し、頭部と羽根部を貼付した後、細い棒状工具でU字と直線を使って、鳥の文様を表現している。くちばし部と、尾部の内側に穴が貫通している。釉は、頭部の直下の胸部に灰釉を用い他の部分（胴上半）には鉄釉を使うという丁寧な心くばりが認められる。（写真39）愛知県東山地区の七曲窯の出土例に酷似し、14世紀代のものと判断される。

次に、E－3G及びF－3Gより、和鏡が出土している。

写真40は、E－3Gよりのもので、ローム確認面より5センチほど上に、鏡面を上にして検出されたもので、遺構に伴なうものではなかった。長径11.1cm周縁の高さ7mmで、背面中央に亀、周縁に鶴二羽、松、竹などがデザインされており、鏡面は平担である。

写真41はF－3Gよりのもので、いたみが著しい。前者とは若干デザインが変っている。まず周帯が二重にめぐっており、内側の周帯の中に、文様が描か

写真40　　和　鏡（1）

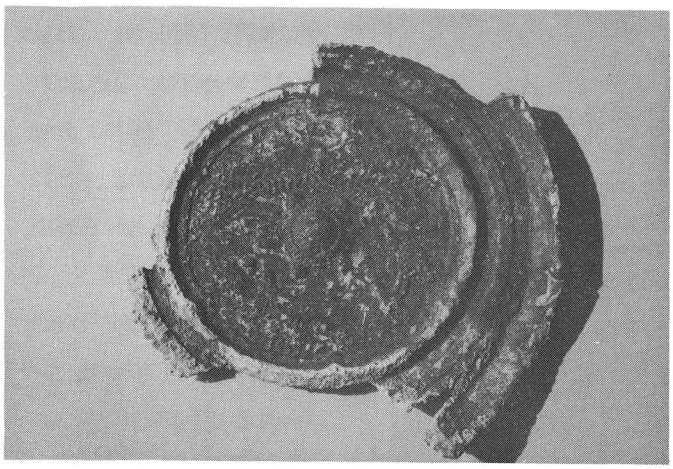


写真41　　和　鏡（2）

写真42　　E地区　全景

れている。中央に亀、周りに、すずめ? 2羽、松、竹が配されている。

両者とも銅製で緑青が全面をおおっている。時期は、両者とも室町時代の中でおさえられると思われる。

3．E地区

D地区の北側に位置する地区である。地形では、D地区の尾根の続きと谷をはさんで西側の尾根の一部をも含んでいる。

E地区より検出された遺構は平安時代の住居址6軒、土壙群ピット群となっている。

平安時代住居址

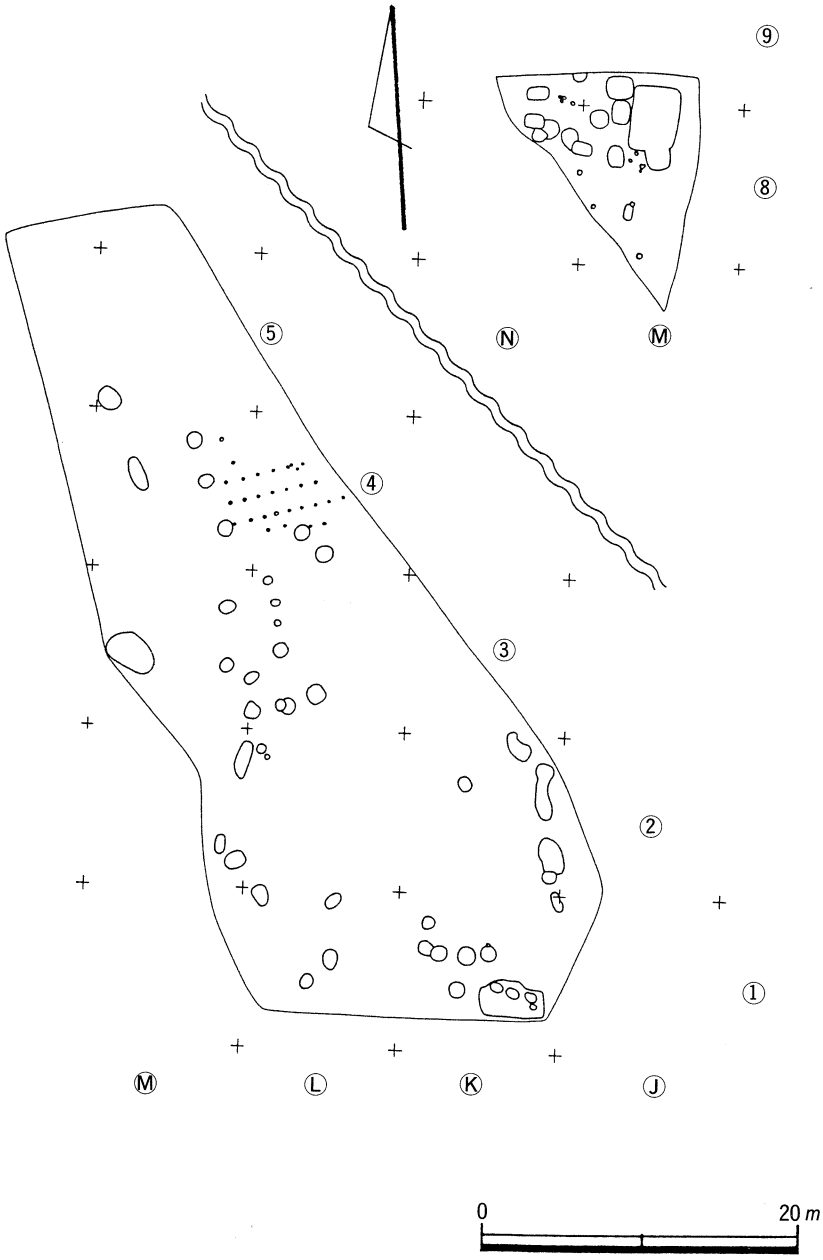
平安時代の住居址は、ある程度のまとまりをみせ、第6号住のみ北にはなれている。これらの住居址群は、D地区北側の住居址群と一体のものと考えられる。（写真42）

写真43は、第3号住居址である。C・D・Eの各地区の平安時代住居址の中でも、最も大きなもので、南北6.12m、東西6.10mのほぼ方形を呈する。壁溝は完周し、床面も堅緻である。

遺物も豊富で、甲斐型坏・内面黒色土器などから、9世紀第4四半世紀前後の時期と判断される。

土　　壙

第５図　Ｅ地区（本区）　遺構配置図（1／480）



第６図　Ｅ地区（西区）　遺構配置図（1／480）

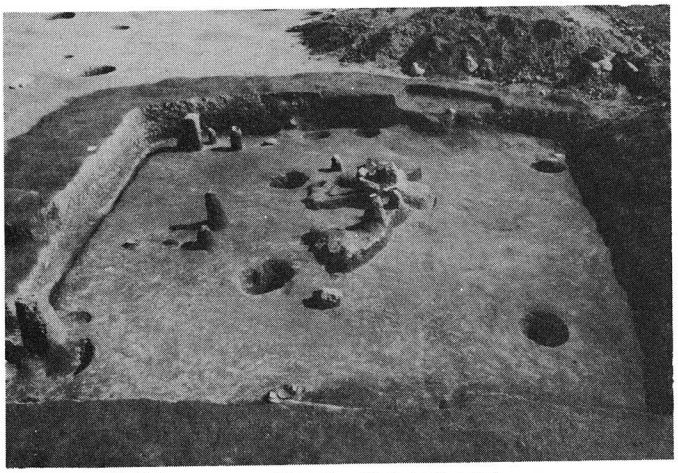


写真43　　E地区　第３号住居址

既に、写真32に示したようにE地区よりは、人骨が残存していた土壙が５基検出されている。そのうち２基が石組土壙であり３基は長方形土壙である。この５基の中で、人骨の遺存状況が最も良好だったものは、写真32である。土壙の大きさよりみて５基の土壙は、屈葬形態を用いたものと思われる。これらの事実から長方形土壙についても石組土壙と同様に、墓地的機能を想定してもよいだろう。

註

（註１）　山梨県埋蔵文化財センターの新津健氏の御教示による。

（註２）　『豆塚遺跡・東新居遺跡』山梨県教育委員会（1984）

（註３）　『勝沼氏館跡調査概報』山梨県教員委育会・勝沼氏館跡調査団（1975）

V まとめ

以上、小和田館跡における、C・D・E地区の遺構・遺物について説明を加えてきた。ここでは、これらから得られた成果を、昨年度調査地点の成果と合わせて簡単にまとめ、総括としたい。なお、小和田館跡は、昭和60年3月時点で整理作業が進行中であり、今後詳細な点については、若干の変更の可能性があるが、この点については、前もって御了承いただきたいと思う。

小和田館跡は、中世豪族の居館址であるところから名付けられた遺跡名であるが、実際は縄文時代中期・平安時代後期・中世室町～戦国時代の三時期の遺構・遺物が検出されている。

まず縄文時代であるが、遺構の上では、中期狢沢期の住居址が2軒、時期不明住居址が1軒、また、住居址としては確認されなかったが、それに伴なうと思われる、狢沢期・新道期の埋甕炉が3基単独で検出されている。これらはすべて、D地区において確認されたものである。住居址・炉址の位置を全側図に照らしてみると、散在的傾向を示し、集落的なまとまりを見せるには至っていないものの、南麓の該期の資料は、これまで僅少であり、貴重な資料が追加されたといえよう。

また、D地区第23号竪穴の覆土中から、縄文早期の愛知県地方にみられる高山寺式の押型文土器の破片が検出されており、注目される資料である。

次に平安時代であるが、本遺跡からは、合計18軒の住居址が確認されている。この期の集落址は、近年、北巨摩郡地方にも類例が蓄積されつつある。大泉村東姥神B遺跡(註1)、高根町東久保遺跡(註2)、長坂町柳坪B遺跡(註3)などは、その良好な例であるが、これらの平安時代集落址には、いくつかの共通点が見出せる。まず第1に、その数の多さである。北巨摩郡地方で遺跡を掘ると、必ずといっていいほど、平安期の住居址が確認される。縄文時代中期の遺跡数をはるかに上まわると言われるゆえんである。第2に、これらの住居址出土の土器をみると、9世紀の第4四半期から、11世紀初頭の間のもので、この期を溯る資料はほとんど見あたらない。特にこの傾向は、台上と呼ばれる、小淵沢町、長坂町、大泉村、高根町の南麓地帯に著しい。第3に、9世紀第4四半期ごろから始まった集落は、10世紀第4四半期から11世紀初頭段階で、急激に姿を消してしまうことである。第4に、集落や個々の住居址には、掘立柱建物址を伴なっていることが多い事である。

これらの事実は、山梨県の学会では既に周知されているところであり、いくつかの説が提示されてきている(註4)。例えば、荻原三雄氏は、上記第4の点に注目し、「公権力」との結びつきの強い計画的な開墾集落としてこれを把えようとし、また、鍛冶遺構から生産手段の自給を考え、さらにこれらは、総体として、牧経営との関連性を重視しなければならない、とされていることは、現段階で、最も妥当的な説として評価されるであろう。

しかしながら、10世紀末から11世紀初頭において、何故この開墾集落が終焉を迎えねばなら

なかったのか、という点については、未だ合理的な解釈が提示されておらず、問題を残している。

9世紀後半における東国は、貞観12年（870） の上総国への太政官符にみられるように、放火・掠奪・群盗が出没し、俘囚が反乱をおこすなど、治安状態は極めて悪く、東海・東山両道に富豪の輩からなる僦馬の党が群盗化し、東国一帯における社会的動揺はおおいがたいものがあった。続く10世紀前半から中葉の、承平・天慶の乱は、古代律令国家の中央集権的な権力機構を完全に破壊し、その底流には、武士団の広域的な発生・組織化が進行し、11世紀の初頭には、平忠常の乱における甲斐守源頼信の活躍にみられるような中世武士団の確立に至る、という激動の時代にあたっている。

こうした歴史の流れの中で、その底辺にあたる在地集落の動向を明らかにしていくことは、今後の課題となろうが、11世紀初頭段階における北巨摩地方の集落が、戦乱による一時的な荒廃は考えられても、その後の甲斐国武士団の伸長からみて、広域的な集落の終焉を想定することは困難ではあるまいか。むしろ集落立地の変化や平地家屋の一般化等の事情を積極的に勘案していく必要があろうと思われる。

次に中世であるが、本遺跡において最も成果が著しかった分野である。まず、D地区より検出された、中世に属する29軒の竪穴をどのように評価することができるであろうか。これらの個々の竪穴から出土する遺物は極めて少なく、正確な時期決定を行なえる状況ではないが、概ね15世紀前後に位置づけられると思われる。また、竪穴の構築方法、柱穴の配列、カーボンの位置などに強い規制が認識され、その規制下において、何らかの機能を果していたと考えられるが、これが住居として判断してよいものかどうか、疑問が残っている。

その理由は、中世15世紀にまで、何故竪穴式住居が存続しなければならないかということである。平城京においては、奈良時代に既に平地式家屋が一般化しているし、東国においても、平安期以降は平地式家屋が一般化するという考え方が常識となっている。

確かに、長野県的場遺跡(註5)や下伊那郡阿南町早稲田遺跡(註6)などに、中世の竪穴式住居址として報告されている例があるが、本遺跡D地区よりの竪穴と類似するものでなく、プランや柱穴については、はっきりした確認がとれないようであり、むしろ遺物の点から決め手としているように思われる。その意味では、中世に竪穴式住居が確実に存在したといえる資料は、現段階では存在していないのではあるまいか。

しかしながら、D地区の竪穴群が住居ではないとする積極的な根拠も、見出されてはいない。9本柱の形式と床面の軟弱な状態からして、板敷構造のものが推測されるし、カーボンの存在は、置きカマド等に伴なう生活の痕跡としても把えられるわけで、また、竪穴内からの遺物は少ないというものの、貯蔵等の機能を有する常滑、煮沸の内耳土器、古銭等は、D地区全体の覆土からは驚くべきほど多量に、かつ均等に出土をみていることから、少なくとも中世のある時点において、D地区が集落の生活空間であったことが想定されるのである。

現時点では、こうした竪穴を住居とするか否かをめぐる２つの相反する根拠を提示するにとどめ、将来に判断を委ねたい。

次に地下式壙について整理しよう。

C地区において検出された12基の地下式壙は、極めて限定された分布を持っている。これは昨年度調査において検出された15基の地下式壙群と合わせて考えていかねばならない。館跡全体からみるならば、東側と西側とに地下式壙群が存在しているという状況で、単なる偶然としてではなく、ある意図をもって配置され、何らかの機能を果たしていたと考えるべきであろう。

しかしながら、また、C地区の地下式壙群は、昨年度調査のものと様相を異にしている。それは、地下式壙より比較的遺物が出土しており、概ね15世紀前後の年代が与えられること、第12号地下式壙より人骨が出土していること、また、12基中10基に、炭の付着が認められることなどで、総合的に判断するならば、墓地説を支持する根拠がより多く提示されたとみるべきであろう。

墓地説を支持する立場をとれば、さらに、D地区に展開する土壙群との関連も考えねばならない。D地区の土壙群は、すでに前章においても説明したように、石組土壙と長方形土壙に関して、墓壙とする蓋然性が高いことから、これらの土壙群と地下式壙を含めた広い墓域を想定できる。地下式壙と一般の土壙との関係はしばらくおくとしても、居館―竪穴群―墓域という遺構の上でのまとまりが認識されるのである。個々の遺構を現時点では、クロスチェックしていないため、詳細な遺構の動きについては、本報告に譲ることとしたい。

最後に、館跡の年代について考えてみたい。

昨年度の調査において、天目茶埦と水滴が、美濃窯の大窯Ⅱ期に属するものということから館跡の終末年代を16世紀の第２四半期に求めたが、今回の調査では、15世紀初頭から17世紀初頭までの遺物が含まれるということが明らかとなった。もちろん、館跡の主郭部分が未調査の段階で、正確な結論を出し得ないことは至極当然の事であり、多分に流動的な結論にならざるを得ないが、可能な限りまとめをしておこう。

15世紀初頭を館跡の、初頭ないしはそれに近い年代とした根拠は、前述の古瀬戸鉄釉水鳥形水滴とD地区第３地点古銭一括の古瀬戸灰釉四耳壷からである。四耳壷に収められた古銭３貫文は、当時においてもかなりな高額のものであろうし、水鳥形水滴も貴重品であることから、当然、館跡との関連を考えねばならないのであろうから、この解釈は妥当と思われる。

反面、館跡の終末については、実のところ積極的に評価できる資料は、きわめて少ない。ここでは、館跡全体の出土遺物の中で、特に陶器類を判断の資料としている。陶器類は、常滑を除けば、数は少なく、また近世陶磁器も含まれていることから、どこまでを館跡に伴なうと考えるか判断がむずかしい。15世紀初頭より16世紀までは、常滑からも後づけられることから妥当性はあるものの、さらに連房式の志野（登窯Ⅰ期）を館跡に伴なうものとして良いか判断に苦しむところであり、一応漸定的な結論として17世紀の初頭を終末年代としておきたい。

註

（註１）　大泉村教育委員会の櫛原功一氏の御教示による。

（註２）　『東久保遺跡』高根町教育委員会　（1984）

（註３）　山梨県埋蔵文化財センターの新津健氏の御教示による。

（註４）『山梨県考古学研究の現状と課題』甲斐路52　（1984）

（註５）　『的場Ⅱ』松川町教育委員会　（1975）

（註６）　『早稲田遺跡その２』阿南町教育委員会　（1983）

小和田館跡発掘調査概報

印刷　1985年3月25日

発行　1985年3月30日

編集
発行　長坂町教育委員会

印刷　峡北印刷（株）